



第 四 號

▲ 目 次

しるびあ姫(長詩)……………青戸白虹	春の夜(短詩)……………多田東岳等	作歌談(評釋)……………袖影	萍(短詩)……………立田紅翠等	征矢(短詩)……………濱田支部咏草	春晝(短詩)……………松江支部咏草	銀箭(短詩)……………米子支部咏草	浴沂(漢詩)……………郷川客漁等	わか草(俳句)……………蘆水等	桃の句(俳句)……………すきき會	茶聲竹色(俳句)……………二葉會	三江追悼集……………	編輯餘言(附録)……………
--------------------	-------------------	----------------	-----------------	-------------------	-------------------	-------------------	------------------	-----------------	------------------	------------------	------------	---------------

銀鈴

第四號

しるふイア姫

白虹生

そも、しるふイア姫とは

若人らが口くちにのゝしるしるふイア姫ひめとは

誰たれぞ

諸もろびとをして讚たへしむると

天あめはかの君きみにくだしぬ

清淨きよよさ、嬌艶あてやめはた聰明さかしき

その美ちつくしさがごと君きみはまた温あたかなりや

美みは情じやうと共に棲すむなるを

きみが瞳ひとみは愛あいをさへへて

闇やみにまよふなからしむ

かくて迷まよふことなく柔胸やわむねの裡うちに宿やどる

さらば、われらは歌うたはむしるふイア姫ひめ

しるふイア姫ひめの秀ひいでしやさ姿すがたを

この光彩あやなき揮輿こんよの上うへにうごめく

あらゆる人間にんげんにいやまさりて
美ちつくしきかの君きみに花冠はなむかひをさへげなむ

(シエークスビヤ)

春の庭

多田 東岳

こゝに日ひを御夢みゆめはつひにさめまさず

しむよ痛手いたてにすさぶ木枯こおらし

それとなくのらすにも似て木枯こおらしのふ

きゆく末すえに耳みみそばだてぬ

こゝにしてとはのみ夢ゆめやいかならん

七尾風ななほよ雪ゆきは乗のせくな(以上、み墓みほにて)

靈凝たまこりてかくてなりにしこの扉小とがらちひ

さわが歌指うたゆびさきて染そめむ(旅順落るちぬ)

平和やはりきの福音ふくゐんたかき筆ふでの香かや酔よひてはこ

いに君きみがみ名なよぶ(畫家ペンズチヤ
ギンをしろびて)

藏田 二葉

新あたらしうはごくまるべき生得せいとくつと希の

望ぞのにもぬぬ小ちひさ我わがたま

はらからが小肩こがたならべて行くといま

燭美しよくちるはしう天あめにさす道みち

物みなに怖ぢぬ力を今たぶとさだかに
 泌みし天のねん聲
 まちていま千とせに得てし春の國石
 うつかせにゆるがしむべき

入澤 涼月

若うして歌に生あり命あり何のまよ
 はしさて幸かある
 草の宿歌ある興の湧きぬるもさびし
 朝睡の衾にたねぬ
 才なくもわが世罵しる我ながら蟲の
 なくごと小さき聲する

福田 紫雲

ねは旨のいと畏こさにためらへばあ
 なたはふれの花かうなぢに
 君と我とふたりしあらむ世ならばと
 夜すがら泣きて成りにける歌
 春の夜の樂に酔ひてぞまろび寝ぬ夢
 よこのまゝ君にも覺むな
 潔うして高きは神に似しものが世を
 導びくに負ふ名尊とむ

河野 翠漱

桃さかば里おのづから輝きの紅な
 らぬ色ねびぬべし
 降る雨の小枝小枝に泌み入りて櫻は
 春の精と咲き出ぬ
 君ありて奇しやつねにも詩は成りぬ
 そもく春は何いろを帯ぶ
 むらさきに靄は流れよ夕ばね野あこ
 がれ姿わが魂も往け
 はる風はよく花咲かす力あり君がみ
 魂もさをひ來よかし

◎むらさき
 紫の字は本會に何んな關
 係ありやは知らざれ共、
 試みに擧げて見むに。元
 の紫星、紫虹は既に之を
 改め。紫雲、紫瀾、紫園
 、紫萍なんど、よくく
 の紫會（詩會）とやいふ
 べき。 (好紫生)

作歌談 (三)

袖 影

いかにして新らしき歌はなるものぞこれ堤案也。

當面の順序として先『美』『藝術』『文學』

『詩』『和歌』等に對し、含する、所の意義

を闡明せざるべからず。然れどもこの雜誌の

性質として、將た限りある紙面の約束として

止むを得ずこれを略せざるを得ざるを憾みと

す。

夫、舊派が所産の和歌に於て、陳腐なるもの

、文學の範圍を脱せるもの等屢々これあるは

余輩の常に聲言する所にして、諸君の亦正に

知了する所なるべきを信ず、而して『陳腐』

なるもの、文學上の價値に就ても、事明白な

るが如くして意義の茫漠たるあるは、われ等

將來の研究に値せむ。

ラルズアルス曰く、『詩は情熱の表現なり』

と、然り、作者はまづ内に情的想像の燃ゆる

ことを要す、徒らに『ふるのやまぶみ』をホ

ヤクリ返して一首成れりといふが如きは眞の

詩人にあらざるなり。既に情感の動くあり、

豈律の成らざらむや。諸君、若し鶯の春なほ

寒き軒近く、轉々妙音を弄するに接し、抑ふ

べからざる情動に接せば先づ筆を執るに及び

て、よく省みざるべからず。

春きぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎり

はあらしとぞ思ふ 壬生 忠岑

鶯の谷より出づる聲なくば春くることを

たれか知らまし 大江 千里

日かずゆくたびの庵をたつごとくに聞さす

てがたき鶯のこゑ 源 頼政

鶯は谷のふるすを出でぬともわが行へを

ば忘れざるなむ 西行 法師

鶯の歌は如斯ものならざるを得ずと思意する

は舊派なり。記せよ、諸君は先づ是等の歌以

外更に別種の趣味を表現せざるべからざるこ

とを、於茲、一應詩材の撰擇を試み、些少に

ても舊派に近しと見ば屑よく唾棄して可なり

。若し諸君の『想像』にして進歩の徑路に入ら

ば必ずや陳套なる詩材に多くの趣味を感せざ

るべく、従つて撰擇に顧慮するが如き煩も比

較的減じ行かむ、これ事實なり。

春の神のまな兒うぐひす嫁ぎくると黄金

扉つくる連翹の花 晶 子

わかき我に戀ならばさむ鈴もつと驚きて

は春の戸に啼く 松永 清亂

これ等の歌と對照して、如何に趣味、調諧等の相違あるかを見れば、蓋し思ひ半に過ぐるものあらん也。乞ふ、余をして、尙一步を進ましめよ。

▲寄贈新刊

●草笛 第三卷第一號

碧雲會の機關誌也。俳味ある表紙畫新に成り、『禁裏の圖』を添ふ。体裁に於て一進歩をなしたるは嬉し。桐一葉の『尙白に就て』穀雨の『縁日』船山の『無題録』梧月の『餘白録』桂竹の『孤燈漫錄』其他俳句數百あり。俳人の一讀せざるべからざるもの。(定價六錢、松江市殿町八十七番地、報光社發行)

うきくさ

○ 立田紅翠(松江)

清興の奇しみ力の鑿歌のけうたに神代ながらの扉は開かれぬ

相見ては何時うつくしの紅に笑むと

樓の宵月み袖ひかへぬ

山茶花の雨たそがるゝ救世經ぐせきやうや、つ

れし人の心さそひ來

○ 助村堇月(濱田)

紅梅は君がたびける菑さいなりかくて三

日經て笑みぬ香みちぬ

このまゝにさびし潮うしほにまかれ行かば

そこに吾等がよき國こくにあらむ(萬年が鼻に立ちて)

○ 片山蘆水(美濃)

我いで、君をめぐると成りし戀斷ち

なば空に虹とかいらむ

夕月に白梅小路春寒のそゝる心や人

に添ひぬる

こは夢か愛の羽衣七彩の卷かれて往なむみ袖たびける

○ 森山翠楊（安濃）

みなし子が淋しうよれる暗黒の戸に

ふと得し大父の聖き御影

ゆくりなうめぐり合ひてはいらから

と聖旨かしてむ幸も得にける

○ 山本明星（大東）

宵々にくしき夢よぶかよわさの胸の

わか草花に生ひ立て

思ひ多しされと手とるによしもなき

兄よ都にいく日生ひたる（梅南兄に）

○ 立石洲洋（八束）

新月のひかりいかにと君よ見る戀は

ひとしほ胸いたましむ

○ 前田木風（米子）

御手とりて二人語らば足るものを世

に追ふかげの戀にやはあらぬ

君知らず戀に生ひしは我も知らず笑

○ 中村秋泉（神戸）

よろこびは千とせ幸ある初春や里居

の君をことほぎまつる

とことばに運命はかなう生ひ立ちし
この子が幸は神のみ許へ

○ 大屋桂水（邑智）

弱くとモ小玉扉は美し扉は汝にこそ

開け勇め小羊

燃ゆる燃ゆる火柱となれ雲となれ凝り

て天降りて冬野をかざれ

よし人は狂ひ男の子と言はいいへ世

の春生まむ犠牲と笑むべき

來し方の負ひし運命に血はかれぬ涙

に笑ふ十九の狂女

萍の艸のしげみに身を避けて眞珠

や生まむ戀の玉貝

征 矢（新涼會 濱田支部）

○ 野田ゆきをを

よろこびは今あふれけるみ教への高

きに倚れと君宣りましぬ

○ 須田紫萍

なにとなくさだめさびしき水仙に君

をしぬびて成りぬこの歌(翼白の君
の病床に)

○ 伏谷 敏子

薄づき夜緋桃はな咲く下蔭にわれ若
うして人の歌誦す

○ 森岡 蹄花

夜は更けぬ月かたぶきぬねは空や星
のひとつに思ひかよへよ

○ 助村 堇月

花といふ花ことぐく光おびて美く
し朝のねどり示すよ

○ 河野 素陽

春風に二人してつく手毬唄君が十五
もよき戀を成せ

我が歌は雲と現じておほ空を馳せ行
くがごと偉大なれかし

美しくし我ら詩の子がつとひをば神
とこしに守りたまふべし(支部を
設けて)

○ 増部 翹白

しばし今秘めて封じてほゝ笑まむ小
さきたま靈守れ紅梅つばみ

そいろ我が成りしこの賦は神たびぬ

闇にはやらじ春の夜の夢

くろがねの鎚のこは手をはぐれつゝ

はぐくまれにし愛のみ翼

聖書にかをりゆかしき梅の花白きを

愛づる我となりにし(以上
二首 病榻詠)

▲濱田支部通信 (二月三日)

濱田支部は去る一月を以て創立せられ、會員
との數未だ多からざれ共、各自最も熱心と眞
面目を以て創作に従事しつゝあり。第一例会
も來ん紀元の佳節に於て開かんとし、漸次基
礎の確定を期せり。今こゝに報導すべく多く
の紀事を有せざれ共、近き將來に於て一大飛
躍を試むべく努めつゝあり (翹白、記)

春 晝

(新涼會
松江支部)

○ 金本 征帆

弱き子の世にたゝかはん力なしつらき劍に

かへてこの歌まゐる

○ 稲田 紫園

崇たかき花彩ある雲のたなびきて春はつ

させぬ輝きかびぬ

○ 坂本 笑風

若き血のわかきゆらぎの夢さめてか
くて悶ねて入らむ詩の領

○ 西 枯 萩

天の譜を乙女の胸の弦つるに秘めてかく
れましたる神にやはあらぬ
み手により天あめめぐり來し我靈の凝り
てや成りし歌か一律

銀 箭 (新涼會 米子支部)

○ 佐々木 春 濤

破れ垣に花咲き出でぬ春の雨木蓮き剪
ると君うらわかき
人や何運命さだめの海の片帆船しほ潮のゆるき
に真帆あげて見む

○ 前田 木 風

ざれ歌も興や春の夜橋にしてみ肩な
らべて遠き灯を見る
若き子の君ゆりねこす春の宵袂ふれ
てやさくらこぼれぬ

浴 沂

○ 郷川 客 漁 (邑智)

同人提議好 探勝學遊仙 西望路猶杳 雲深
有福泉

閑步索詩料 烟霞足勝遊 紅楓與黃栌 繪出
幾邨秋

靈泉流混々 澄徹照酡顏 人道能醫病 浴餘
心自閑

一仙杯獨傾 數子吟仍苦 詩酒儘風流 蕉箋
翻墨雨

浴後三杯酒 醉中幾首詩 溪樓今夜夢 應與
白雲期

起來先浴泉 偏覺風塵遠 不咎少嘉肴 朝餐
加一椀

徑幽苔氣冷 浴罷步前山 青女染成錦 祠邊
樹爛斑

○ 暢園 陸 農 (邑智)

風詠節尤好 忙中學半仙 傭童何所齎 美酒
與雲箋

要朋於有福 半日入清娛 俗後從何事 浩歌

傾玉壺

三岳樵夫（邑智）

同遊三五友 錦綉有詩篇 夫子只親酒 悠々學睡仙

▲寄贈新刊

●文庫 第二十八卷第貳號

青年の一度び手にせざるべからざるは本誌也。本號所載の『明治文壇側面史』を讀まば、蓋し首肯する所あらん、論文、美文、小説、日記、詩、俳句等、一として見られざる無し、但和歌だけは預りの事。（定價拾五錢 東京市本郷區駒込西片町十番地 内外出版協會發行）

わか草

朝寒や野川にながる花の骸

片山蘆水

納豆汁鼻を鳴らして句を得たり

木風

更科に春待つ家や白の音

焼鮎の串釣り下げて春寒し

焼跡に古錢を掘る餘寒哉

夕雲の動かんとして雲雀かな

魚棚に少し残れる白魚哉

白魚を煮賣る小店の柳かな

征帆

笑風

白魚賣り傘さして京の町

白魚に木の芽も付て煮たり鳧

白魚汁はれ衣の膝にこぼれ鳧

献燈の文字うるはし秋祭り

新年の筆麗はしき葉書哉

夜三更の水碎きて奇襲哉

水鳥も騒がざる間の奇襲哉

寒空に鐘劈けり御待夜

雪洞に櫻散り來る廊下哉

客待の辻の俵や柳散る

水仙や朝を佛師の眉白き

銀盃に紅梅の譜を註し鳧

珠の欄に歌屑なげぬ春の水

放ちぬる歌白鳩やはつ霞

懸想文二つに裂けて梅薫る

桃の句

（大原郡すくき會）

盛りとや散り初めたる桃の花

山莊に若き僧あり桃の花

桃咲くや隣に遠き一つ家

畑打の何を焼くらん桃の花

春郊

白桃

擣衣

紫仙

枯荻

落村

郷水

夢蝶生

一條柳雨

日受よき山に先づ笑む緋桃哉
山里や麥畑つゞき桃の花
白桃や白さを愛づる小家ぶり
桃咲きて老も炬燵をはなれ鳧
桃咲くや南の椽に鳥餌摺る
野社や鳥居續きにもゝの花
牛の鳴く聲も聞こゆつ桃の花
もゝ咲くや貝細工賣る浦の家
山里やさて暮おそきもゝ林

茶聲竹色

(美濃郡
二葉會)

笛吹くや按摩の寒き月夜街
草枯や落葉のあとの留守の家
白梅や管公の寮神さびつ
齒固や喰ひ残したる祖父の椀
つんどして改りたる御慶哉
冬されて目につく岩の高さ哉
歩哨立つ松のうしろや冬の月
羽子の羽に口紅薄うゝつり鳧
古傘の寒そうに行く時雨かな
若水に星を汲み込む静か哉

翠 蔭 洋 州 曉 聲 百 笑 靜 子 蛙 水 星 子 明 星 同 魂 休 同 傾 月 三 痴 同 萩 猪 督 包 無 銘 月 村 同

水祝ひ庭の小砂にしどろあど 硯海
にこゝと正月爺の笑顔哉 遁郷

會友三江井上信三君、去年征露の役に
従ひて、旅順の背面攻撃に参加し、遂
に倒る。君は那賀郡淺利の人、夙に詩
文に志し、わが新涼會中最も古き會友
の一人たり。我等は君の遠逝に對し、
滿腔の赤心を以つて、爰に哀悼の意を
表示す。

新涼會々友一同

計報到るや、本會河野岩雄は直ちに、新涼會を代
表して、實父井上源次郎氏に、弔詞を送呈せり。

河野 素陽
更くる夜の君をしなげく我が歌
ぞ天の御座に君聞こすべき

福田 紫雲
あめ座にとこ安らけき君はしも
戦のうたに神を泣かしむ

大屋 桂水

犠牲を榮と神にちかひし七年は
『君が旅順の終焉』にぞ見る

藏田 二葉

雄々しかる足らひおぼわて往に
まし、御靈を泣くとうたに聞こ
さむ

かくてこそ天にはそはむ一人ぞ
とたふれし友に喜こばれぬる

河野 翠漱

白梅や精やいと花天のぼる足る
と笑みつゝ君天のぼる

やさしうも奮ひ立ちつる君なれ

ば詩の常花は天にかざらむ

▲寄贈新刊

●白虹 第一卷第二號

本誌載する所の評論文小説美文韻文等材料の豊富なる体裁の調ひたる地方文學雜誌中有數の者也入澤涼月の幹する所。定價金拾錢發行所岡山市大字花畑卅番地血汐會

●信州青年 第二卷第五號

本誌は徒らに内の叫び盛にして靈的生命の顧みられざらんとするを憂ひ記者が熱烈なる基督教の信仰を眞執なる筆致もてうつし出せるもの靈に生きんとするもの一讀すべき小雜誌なり 定價金六錢 發行所信州上田町乙二

八五番地其社 (柱)

▲編輯餘言

▲投稿非常に多くして、次號に廻はせるもの、少からざるは、深く遺憾とする所也。

▲爾後新涼會支部を左の所に設けたり。

第四支部 出雲國大原郡大東町 山本恒二君方

▲新涼會は松江『松陽新報』を以て、機關紙と定めたり、以後同紙及び『銀鈴』に限り詠酬を發表すべし。

▲次號へ切は四月五日、發行五月一日なり

▲前號『れもひ出』の筆者鹿守生より來書あり

前略 白虹の二葉會及葉櫻の紫堇會再興せし由、拙稿『れもひ出』何だか變にあり候。葉櫻はあんな眞似せなくともと思はれ候、併し熱心は感服の外無之候。碧雲氏より『しのゝめ會』發奮を通知し來り候 (後畧)

▲新涼會々費毎年五拾錢に改め候、會友諸氏は本年分會費本月中に御送金被下度し。拾

五錢以上の分納は差支無之候。新入會友諸君も此際御納付被下度候。

▲『銀鈴』一號、二號、三號、凡べて殘部なし

要望の諸君は取次所につき問合されたり。▲松江支部の幹事西君辞任、金本君就任致されたるにより左の通り變更す。

松江市灘町新丁 金本亮君方

●碧雲會

(松江市南田)

●本會は明治三十年松江に創立したる者にして關西に於て最も古き歴史を有する俳會也●本會には何人にも入會するを得但し機關の俳誌『草笛』の讀者たる事を要す●例會は當分第一土曜夜北田普門院に開く會費五錢、殘餘金を生じたる時は『草笛』發行費に加ふ。平時の雜詠は『松陽新報』に掲載し佳句は別に『ほとぎす』に報告し且本誌の俳句分類に加ふ

◎學の友◎

◎每月一日一回發行、第卅八號既發、一冊金四錢、七冊半年分前金貳拾六錢、十四冊一年分前金五拾貳錢、郵稅不要、切手代用一割増

◎『學の友』は専ら小學兒童の好同伴となり又家庭少年の良師友となるべき學術雜誌であつて其の記事も教育家の寄稿數篇の外は皆大方讀者の投書のみであります
◎内容は◎譚海◎寄書◎小説◎學藝◎雜錄◎詞叢◎討論でありますが別に『名刺交換』といつて少年の筆蹟をも掲載しますから面白くして中々ね爲にもなります依て學術に志ある少年諸君は早く來つて此の『學の友』と交りたまへ
◎投書は誰にても汎く歓迎いたします

發所行 出雲國赤名 學友雜誌社

本誌定價		隔月	行發	種別	定價	郵稅	合計
一ヶ月	參錢			廣告料			
一ケ年	拾八錢			一行拾錢	一頁貳圓		
		拾貳錢		▲誌代廣告料等總べて前金の事			
		參拾錢		▲本誌特別號に對しては代價不同			

明治三十八年二月廿三日印刷
同 年三月一日發行

編輯兼發行所 河野岩雄
島根縣邑智郡田所村大字下田所 七百三十二番地

印 刷 所 木村柳三郎
島根縣飯石郡赤名村大字赤名 八百三番地

印 刷 所 赤名活版所
島根縣邑智郡田所村

發行所 銀鈴社
石見國濱田町榮町

取次所 共榮堂
出雲國大原郡大東町

取次所 芙蓉堂

▲互選五歌集募集

●題。 隨意。 締切三月廿日（二十日迄に幹事に到着せざるものは加へず）

●出詠、一人五首を限る。五首より少からず、多からざることを要す。

●出詠者には四種郵便を以て、順次歌集を廻覽に供す、佳調五首を選びて、幹事に報告すべし。

●詠艸は幹事に宛て直接發送すべし。

幹 事

石見邑智郡田所村鯉淵

大屋左一

▲互選十句集募集

●題。 春の水。 締切三月廿日（二十日迄に幹事に到着せざれば加へず）

●出句、一人十句を限る。十句より少からず、多からざることを要す。

●出句者には四種郵便を以て、順次句集を廻覽に供す、佳吟十句を選びて、幹事に報告すべし。

●詠艸は幹事に宛て直接發送すべし。

幹 事

松江[○]市灘[○]町新[○]丁

金 本

亮

右結果は就れも『松陽新報』及『銀鈴』を以て發表す

新涼會清規

一詩を愛し、詩を楽しむものは、入りて會友となることを得。

一會友は毎年五拾錢の會費を納むべし

但一回拾五錢以上に限り分納を許す。

一會友には毎號雜誌『銀鈴』を無代配附し且つ毎年一回會友名簿を頒與すへし。

一支部は會友五名以上の地に設く。支部清規は其支部限り任意規定することを得。

一本會を島根縣邑智郡田所村大字下田所に置く。

(明治三十八年一月改定)

銀鈴社維持費募集

「銀鈴」發行に就いて、われ等が微哀を諒せられ、維持費を恵まれ候はば、太幸に存候。社中同人謹言